ソグドの都市の研究
―ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡の発掘調査(2024)―

宇佐美智之　京都芸術大学専任講師
ベグマトフ・アリシェル　サマルカンド国立大学考古学学科准教授、ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー研究員
ラフマノフ・ホゥスニディン　サマルカンド考古学研究所研究員
エルガマル・モハメド　考古監督官　エジプト観光・古代遺産省
マミロフ・オモン　ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究センター研究員
ミルザアフメドフ・シロジ　サマルカンド考古学研究所研究員

A Study on Sogdian Cities: Excavations at Mingtepa in Uzbekistan (2024)

USAMI, Tomoyuki　Junior Associate Professor, Kyoto University of the Arts
BEGMATOV, Alisher　Associate Professor, Samarkand State University, Department of Archaeology. Research Scholar, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences
RAKHMONOV, Husnidin　Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
ELGAMMAL Mohamed　Inspector of Antiquities, Egyptian Ministry of Tourism and Antiquities
MAMIROV, Omon　Research Fellow, Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology
MIRZAAKHMEDOV, Siroj　Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

1. はじめに

ソグド(ソグディアナ)とは、中央アジアのザラフシャン川およびカシュカ川の流域を指す古名であり、現在のウズベキスタン中央・南東部、タジキスタン北部とトルクメニスタン北東部の一部にあたる。

従来、ソグドに関して最も知られるのが交易の民としてのソグド人の活動である。しかし現在では、交易に限らず、政治・軍事・芸術文化など様々な面でシルクロード史上重要な役割を果たしたことが明らかになりつつある。一方で、ソグド本土における社会の形成・変化については資料的制約が大きく、議論が十分深められていないところも多いといえる。

報告者らはこのような問題をふまえ、日本・ウズベキスタン国際共同調査プロジェクトを立ち上げ、その主要な取り組みとして2021年度からサマルカンドに所在するミングテパ遺跡の発掘を実施している。

この遺跡の発掘については調査範囲が限られていることもあり、今後の課題が多く残されているが、興味深い知見やデータが蓄積されつつある。本報告では、2024年度の調査結果を中心に紹介するとともに、これまでの成果をまとめつつ見通しを述べることにしたい。

2. 研究背景

ソグドを含む中央アジア地域は、その大部分を砂漠とステップが占める乾燥気候下にある。そのためパミール高原からアラル海に注ぐ2つの大河、アム川とシル川は、歴史的に非常に重要な役割を果たしてきた。アム・シル両河川に囲まれた範域はトランスオクシアナ(マーワラーアンナフル)とも呼ばれ、農業を基礎とするオアシス社会が各所に展開したことがわかっている。その中でも中核をなしたのがザラフシャン川・カシュカ川流域のソグドであった。

ソグドの中心地はザラフシャン川中流域のサマルカンドで、その存在はアケメネス朝ペルシアの時代には知られる。一方ソグドにはいくつものオアシス国家があったとされ、漢文史料からは、サマルカンドを指す康国のほか、何、安、史、曹、米などの国名が伝えられる。ただし、康国の中心都市として著名なアフラシアブ遺跡、あるいは米国(マーイムルグ)の中心都市に比定する見解もあるペンジケント遺跡など、長年の発掘により学術研究が進展している例はあるが、上記の国々の多くについてはその実態を考古学的に十分把握するには至っていない。

後述するように、ミングテパ遺跡についてはこれまでに小規模ながらも複数回の考古学調査が行われてお

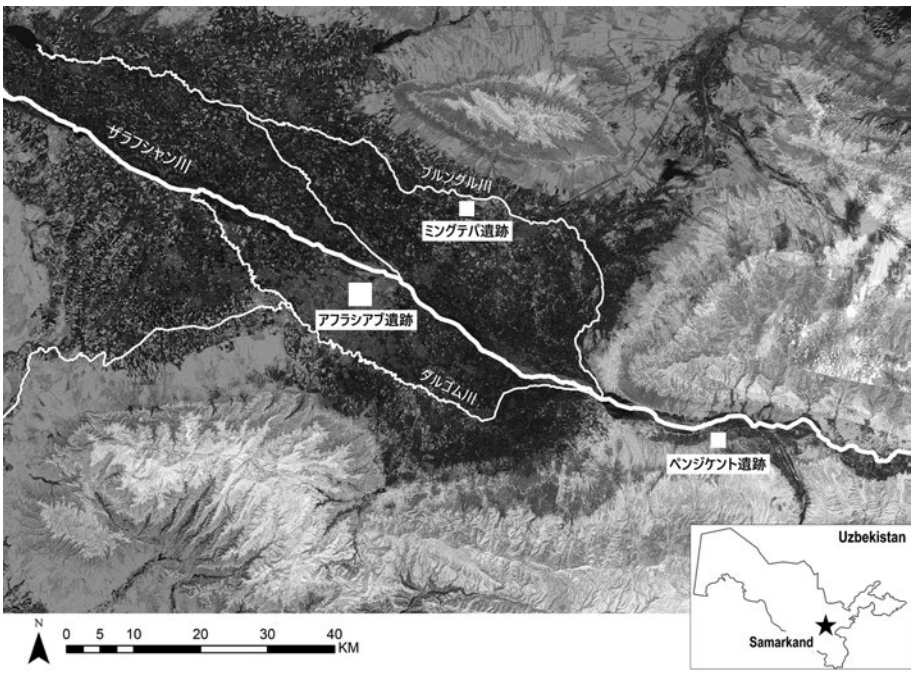

図1　ミングテパ遺跡の位置

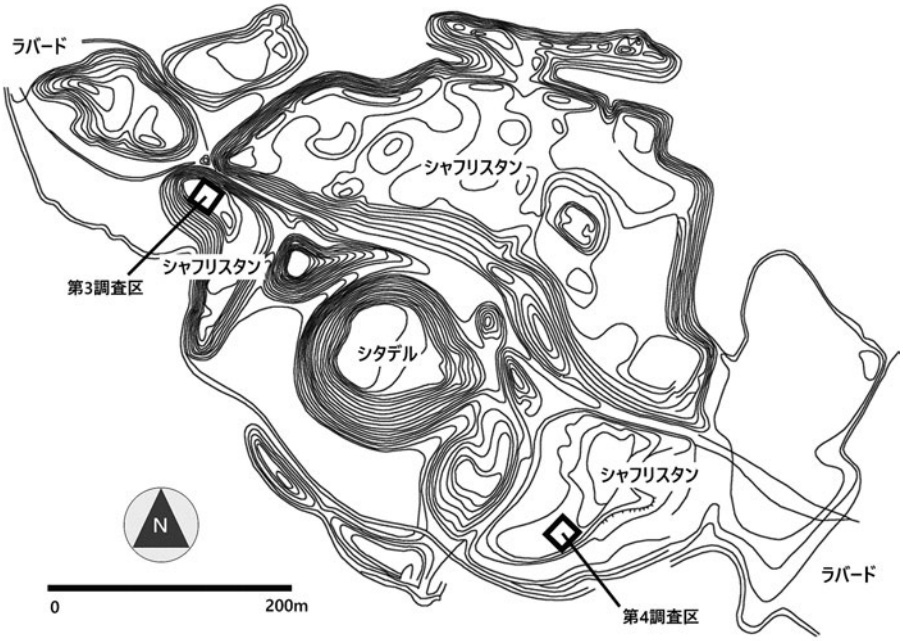

図2　ミングテパ遺跡の概況と調査区（Akhunbabaev1983より引用・改変）

り、この遺跡を曹国の中心に比定する意見が出されている。この点を念頭に置きつつ、基礎的な資料の収集・分析を進め、この遺跡の性格や変遷について議論を深めることが本調査研究の課題である。

3. ミングテパ遺跡の概要と研究史

本プロジェクトが対象とするミングテパ遺跡は、学史的に著名なアフラシアブ遺跡（現サマルカンド市）の北東約20 kmの地点に位置する（**図1**）。北にはゴブディン山脈があり、ザラフシャン川の支流であるブルングル川が西流している。この地は、シル川北岸のタシケントやフェルガナ盆地、ウステュルシャナなどの方面からソグド本土へ入る場合の「ゲートウェイ」に相当し、ソグドの北の要衝というべき立地である。

ミングテパ遺跡において、現存の遺跡面積は35 haをこえるが、周辺は土地開発や農地化が進み既に消失した部分も多くあるとみられる。推定される遺跡の構成としては、他のオアシス都市遺跡でも一般的に認め

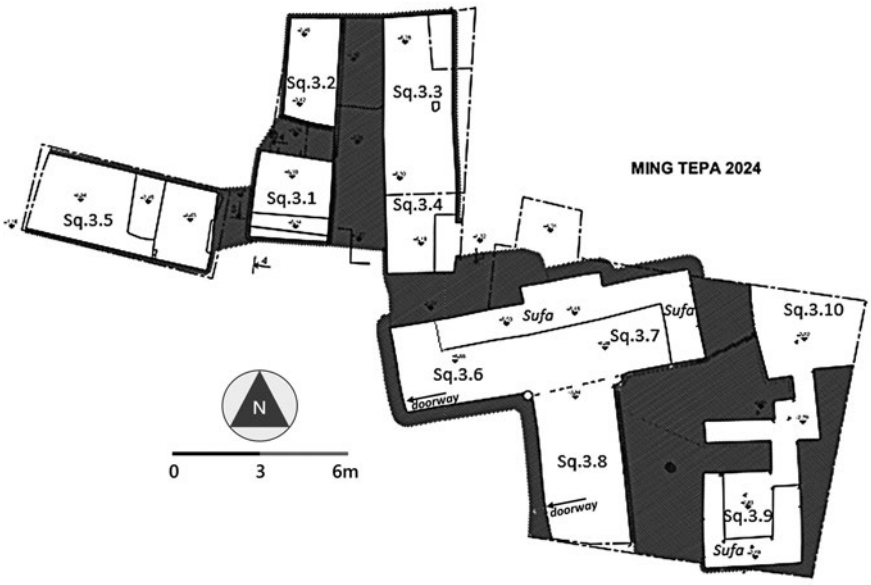

図3　第3調査区における発掘区の配置

られるような主要な空間を城壁が取り囲むものであり、城壁内側には最重要部のシタデルとシャフリスタン（市街区）が、城壁外側には主に東西にラバード（市街地外の居住地／郊外）が存在する（**図2**）。なおシタデルは遺跡内の南側に設けられており、比高差（周辺平坦面からの高さ）12 m 程の不定形の高まりをなしている。

ミングテパ遺跡への着目は学史的に比較的新しく、1983年の H. Ahunbabaev による調査を端緒とする。その後2014年に A. Atohojaev と S. Kubaev によりシャフリスタンでの小規模な発掘が実施された。その発掘では西暦6〜8世紀および11世紀頃の資料が確認されている。また2017年には、本プロジェクト共同研究者である H. Rakhmonov によってシタデルからシャフリスタンが調査され、西暦7〜8世紀頃の遺構・遺物が検出された。本プロジェクトでは、こうしたシャフリスタンを中心に散発的に行われてきた調査をふまえ、後述のようにシャフリスタンを中心として調査区を設定し発掘を進めている。

4. 2024年度におけるミングテパ遺跡の調査

2021年度に開始した本調査では、シタデルを挟んで東西に第3調査区、第4調査区を設定した（**図2**）。2023年度には東のラバードにあたる場所（**図2範囲外**）に第5調査区を設定し、調査を実施している。なおこれまで調査を中心的に実施している第3調査区においては、2021年度に4つの発掘区（3.1〜3.4）を定め、その後2022〜2024年度にかけて順次拡張し、現在までに計10区（3.1〜3.10）で発掘を進めている（**図3**）。2021〜2023年度における調査結果については各報告を参照されたい（ベグマトフ・宇佐美ほか2022・2023・2024）。

2024年度においては、第3調査区、第5調査区で発掘を実施している。以下、第3調査区を中心に調査結果の概要を述べる。

第3調査区では、前年度の調査をふまえ3.6、3.7、3.8区画を発掘し、イスラーム以前の西暦6〜8世紀頃を中心とする遺構・遺物が確認された（**図3**）。3.6、3.7区画は一体的な回廊状の部屋をなし、南北の長さは10.5 m、東側の幅が約3.1 m、西側の幅が約3.5 mである。この部屋にはスファ（ベッド状遺構）が伴い、その幅は東側で約115 cm、西側で約105 cmである。3.6区画の第一床面からは土器や骨などが多く出土しており、現時点では詳細不明ではあるが調理場的な機能も予想されている。なお、これら区画は2階建ての構造をとり、アーチ状の屋根を伴っていたことが明らかになった。この具体的な構造については次年度の調査をふまえ検討を加える。

また、3.6区画の南西側に方形状の出入口（173×100 cm）があることがわかった（**図4**）。3.8区画の西側にもアーチ状出入口が確認されており、次年度には第3調査区を西側に拡張し、この詳細を明らかにする必要がある。

出土遺物については、大量の土器片のほか、貨幣や

図 4　3.6 区画南西側で検出された出入口

図 5　ワヌック(？)王の貨幣(西暦 7 世紀前半)

図 6　テュルガル王の貨幣(西暦 8 世紀半ば頃)

図 7　その他ソグドの銅製貨幣(西暦 8 世半ば頃か)

図 8　人物表現のある長方形状土製品

動物骨などが確認されており、現在整理・分析中である。貨幣は年代特定に重要な役割も果たすが、現在把握されているものは西暦 7〜8 世紀の銅製貨幣が主体であり(**図 5〜7**)、土器の時期とも整合的である。なお、第 3 調査区ではこれまでに火災層が検出され、これまでの調査からその時期が西暦 8 世紀中頃ないし後半と推定されており、本年度に発見された貨幣はそれとも一定程度対応する。なお特徴的な遺物として、人物表現のある長方形状の土製品(**図 8**)が確認された。現時点では想像の域を出ないが、唐代に中国国内で知られたソグド人の舞踊「胡旋舞」を表現したものとする意見もあり注意される。

東のラバードにあたる第 5 調査区周辺では、いくつもの丘状の高まりが存在し、それらをクルガン(墳墓)とみる立場がある。このことを確認するため小規模なトレンチを設定し発掘を実施した。結果、人骨が出土し埋葬施設が存在したことは判明したが、西暦 6〜8 世紀を中心とする第 3・4 調査区とは異なり、カラハン朝期の生活遺構なども確認された。これまでのところイスラーム以前の時期については不明である。

5. まとめと今後の見通し

以上のように、本年度におけるミングテパ遺跡の調査からはシャフリスタンを中心として新知見を得ることができた。また出土資料にもとづく中心時期の特定が進みつつある。

ソグドの北の要衝を占める立地や遺跡規模、多重の

囲郭施設をもつ遺跡構造などから判断してミングテパ遺跡は域内で際立った存在であり、さらに本調査を通して西暦5〜8世紀を盛行期とすることなどが把握されてきている。この遺跡はソグドの有力な都市遺跡として、重要な役割を果たした可能性が高いといえる。今後上記したような曹国(カブダン)に比定する従来説も裏付けできるかもしれない。しかし将来的に重要となるのは遺跡中枢のシタデルを調査することであり、それによってこの都市遺跡の性格や構造の理解を具体的に深めることができると考えている。

なおミングテパ遺跡では、近隣の大規模レンガ工場により土地開発が急速に進み既にラバードの一部は破壊されている。2023年度に開始したラバードの調査(第5調査区)はこれに対する危機感を背景に着手したものでもあるが、本調査の継続実施を通して遺跡の価値を確認・共有し、このような問題状況を改善していくことにも努めたい。

付記：本調査は科研費(代表：宇佐美智之、23K00922)を受けて実施したものである。

■参考文献

・Akhunbabaev Kh. G 1983 Archaeological study of the Bulungur area in 1979-1980 History of the material culture of Uzbekistan. Tashkent, 18, pp. 154-165 (in Russian)
・ベグマトフ・アリシェル、宇佐美智之、ラフマノフ・ホゥスニディン、サンディボエフ・アリシェル、ボゴモロフ・ゲンナディー、ミルザアフメドフ・シロジ　2022「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2021年度)」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』18-22頁　日本西アジア考古学会。
・ベグマトフ・アリシェル、宇佐美智之、ラフマノフ・ホゥスニディン、デクルイネール・デルフィーヌ、ミルザアフメドフ・シロジ　2023「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2022年度)」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』124-127頁　日本西アジア考古学会。
・ベグマトフ・アリシェル、宇佐美智之、ラフマノフ・ホゥスニディン、オモノフ・ディルムロド、ボゴモロフ・ゲンナディー、ミルザアフメドフ・シロジ、デクルイネール・デルフィーヌ、ゴルモハマディ・ザフラ　2024「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究：ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2023年度)」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』155-159頁　日本西アジア考古学会。
・宇佐美智之、ベグマトフ・アリシェル、ラフモノフ・ホゥスニディン　2024「ソグドの都市の研究：ミングテパ遺跡の調査と展望」『考古学ジャーナル』801、35-37頁　ニューサイエンス社